

多文化時代における歌唱教育

ー 米国の幼児教育における歌唱指導内容に着目して

早川純子
櫻井琴音
(西九州大学)

Singing Education in Multicultural Era
: Preschool Music Textbook in the United States
HAYAKAWA Junko, SAKURAI Kotone

キーワード：異文化理解 歌唱教育 米国幼児教育

概要：本研究の目的は、米国で広く活用されている音楽の教科書 *Silver Burnett Making Music* の指導書を対象に、多民族国家における異文化教育が如何に推進されているかを歌唱活動に着目して考察することである。特に、同テキストで掲載されている日本の楽曲を取り上げ、日本の歌唱曲が米国の教育現場でどのように取り扱われ活用されているかに注目する。同書は幼児向けのテキストでありながら多くの音楽理論的要素への言及がなされ、多分野との領域横断的な視点や平和主義的な異文化理解の試みが特に特徴的であった。その背景には、教育の基準となる米国のガイドラインの存在があり、日本の幼稚園教育要領との違いが教科書の指導内容を通して見ることができた。

はじめに

教育の分野ではグローバル時代を生き抜くためのグローバル教育が推進されている。平成20年告示の学習指導要領改定の背景には「グローバル化の進みにもたらされた国際競争の加速と同時に、異なる文化や文明の共存と国際協力の増大の時代になること」(董・足立2009:45)が挙げられ、教育分野にもグローバルな視点が盛り込まれる要因となっている。このような時代、文化を取り扱う音楽科教育に対しては、グローバル教育に対する「積極的な貢献が期待」されている(加藤・奥2002:11)。果たして音楽科の学習指導要領においては、グローバル教育に関連する記述が見られる。例えば、小学校の鑑賞領域においては「諸外国」の音楽に親しむ内容が、中学校では教科目標において「音楽文化についての理解」という文言が示されている。つまり、音楽は諸民族ないし諸国の

歴史、文化、風土等々を通して生み出され継承されてきた固有の音楽文化であるため、文化を象徴するものとしての取り扱いが可能なのである。また、グローバルといえば一見外国のことを指すように思われがちだが、グローバル化によって世界中のあらゆる文化が顕在化していくということは、自らの文化も他文化同様に相対的に立ち現れてくる。そこで、グローバル教育については二つの方向性が想定できる。つまり、異文化についての理解と、自分の属する文化についての理解である。音楽科教育でも、異文化教育の視点とともに、近年「我が国の音楽」に関する教育の充実を図る傾向が強くなっている。後者では、平成20年告示における学習指導要領で歌唱共通教材¹の充実が図られ、平成29年告示で踏襲されたことから分かる。つまり平成20年では、歌唱共通教材が各学年ともに取り扱う楽曲数が増加した²。こ

¹ 昭和33年(1958年)告示の小学校学習指導要領で初めて設定された。「我が国で親しまれてきた唱歌や童謡、わらべうた等を、子どもからお年寄りまで世代を超えて共有」(文部科学省)することを趣旨としている。

² 第1学年から第4学年までは、第7次学習指導要領において4曲中3曲であったものが4曲すべてを取り扱うことになり、第5学年及び第6学年では、4曲中2曲だったのが、4曲中3曲を含めて取り扱うことが示された。

の背景には、次に挙げる平成20年告示の音楽科学習指導要領改善の方向性の一つが挙げられる。すなわち、「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。」(文部科学省2008³)という方針である。また、「和楽器」や「我が国の伝統的な歌唱」の取り扱いについては、平成10年告示から中等教育において必修化し、小学校は第5学年及び第6学年において「児童の実態に応じて選択」することが示されている。

さて、多民族国家である米国は、教育内容も多文化性が豊かであることは想像に難くない。特に、音楽のように文化を学習する教科においては、音楽文化を教材として活用し異文化教育を行うのには都合が良い。日本でも、近年各地の学校に外国人の子どもが就学するケースが増え、学校の国際化・多文化化という新しい環境が生まれており参照すべき点も少なくない。そうした状況に対応し子どもたちが孤立しないよう支援するためにも、国際感覚と異文化に対する理解や柔軟性などが必要になるだろう。

研究の目的と方法

以上のことを踏まえ、本研究では米国で広く活用されている音楽の教科書 *Silver Burdett Making Music* の指導書 (Teacher's Edition) を用いて、多民族国家における異文化教育が如何に推進されているかを歌唱活動に着目して考察する。特に、同テキストで扱われている日本の楽曲を取り上げ、日本の歌唱曲が教育現場でどのように取り扱われ活用されているかに注目する。また、同テキストの特徴の一つは日本の小学校音楽科教育における〔共通事項〕に該当する音楽理論的要素が多分に盛り込まれていることが挙げられる。日本の

小学校音楽科教育においては、全ての活動に共通して〔共通事項〕を扱うことが示されており、理論的視点が豊富な米国のテキストはその点において大いに参考になると考えられる。したがって、〔共通事項〕にあたる特に音楽理論的要素に着目しながら考察を進めていく。

同テキストは、就学前の幼児対象 (Grade K) から作成されている。筆者は、幼児期の音楽活動と小学校の音楽科教育との接続期における音楽教育のあり方についての研究 (櫻井・早川2018) を進めている関係から、まず本研究では就学前の Grade K のテキストを考察対象とし、次の段階として小学校低学年対象のテキストを取り上げ、幼小の接続性に着目した教材研究を行っていきたい。Grade K で日本の楽曲として紹介されているは、わらべうたの「おまわし おまわし」「かえるのうた」「りんしょう りんしょう」の3曲である。他にも「しあわせなら手をたたこう」や「ロンドン橋」など、日本で親しまれている楽曲も掲載されているが、もともと外国の曲であり日本の曲としての紹介ではないため本研究では取り上げない。考察対象とする3曲のうち「かえるのうた」は広く知られ、輪唱ができる曲としても親しまれている。一方、「おまわし おまわし」と「りんしょう りんしょう」は、現在の日本人でどれほど知る人がいるか定かではない。全国大学音楽教育学会は、2009年全国の保育者養成校音楽教員と保育者を対象に、音楽的に優れた作品で後世に伝承する価値の高い子どもの歌について調査したが、500曲以上が挙げられた中で、この2曲は含まれていない (共同研究実行委員会2009)。したがって、今日あまり親しまれた楽曲とは言えず知名度は低いと考えられる。これらの楽曲が日本の子どもの歌を代表するものとして外国の教科書に取り上げられる理由は他にあるのかもしれない。

以上の3曲について、掲載順に考察を進める。各曲の楽譜には英語と日本語 (ローマ字) での歌詞が併記されており、授業のポイントが簡潔に記

³ 文部科学省HP [資料4-1]「音楽科、芸術科 (音楽) の現状と課題、改善の方向性 (検討素案) (教育課程部会等の審議を踏まえて再整理したもの)」参照。

されてる。また、美術・算数・理科等の歌に関連する活動が明記され、導入・展開・終末・評価等と段階的に活動内容を深めていく道筋が示されている。なお、同書の構成については曹（2005）の論考に詳しい。

楽曲1 わらべうた「おまわしおまわし」

この歌は、伝統的な日本の遊び歌として紹介されている。

歌詞「おまわしおまわし ねこのめ」

英訳のタイトルは「Go Around the Cat's Eye」、歌詞は「Go around and go around the cat's shining eye」と英訳され、日本語歌詞と併記されている。

指導書の冒頭では、授業のポイント（Lesson at a glance）あげられ、以下のように一目で確認できるように、短い言葉で箇条書きにまとめてられている。

学習の中心となる要素…「リズム」一定の拍
目標とするスキル…「動く」異なる様式やテンポで録音された音楽を聴き、音楽の一定のテンポに合わせて動く。

関連する活動…「美術」猫の絵の違いがどのように「見た目」の違いをもたらしているか探求する。

教材 アフリカの“Juba”という歌、「おまわしおまわし」、および“Go Around the Cat's Eye”という「おまわし おまわし」の英語詞版。

遊び方（Dance Directions）（“Juva”については省略）

まず、小さな子どもは交互に「鬼」になり、日本語で数えることを楽しむだろうと説明している。

- ・ 編成…子どもは手を後ろにし、互いに近寄って円になる。そのうちの一人が「鬼」になり、円の中に立ち目をつぶる。

- ・ 歌…子どもたちは、「大理石でできた虎の目のような玉（tiger's eye marble）」を円の外側で次々に回す。次に、子どもたちは日本語で、1・2・3・4と数える。「鬼」は「私に虎の目を見せて！」と言い、誰がその玉を持っているか3回以内で当てなければならない。玉を持っていた子どもが次の鬼になる。

発音練習と英訳

ここでは、以下のように日英語で発音練習することが求められている。

フレーズ1 「おまわし おまわし」

Go around, go around

フレーズ2 「ねこのめ」

The cat's eye.

語彙 …一定の拍、様式

国の基準（National Standards）⁴

- 1a 一定のテンポを保ちながら、自立的に歌う。
- 6b 動いたり、質問に答えながら音楽を表現する。
- 8b 音楽が美術や言語学習にかかわる方法を特定する。

また、同テキスト掲載の他の楽曲に関連するものについて参照を促している。

以上が、簡単にポイントだけを記した箇所である。

全ての教材は、見開き2ページに1曲が配置され、指導内容とともに楽譜が掲載されている。「おまわし おまわし」は、左ページに2種類の猫の絵が並べられ、「2つの絵はどう違っているか？」「猫のように動いてみよう」との指示が記述されている。右ページには、「Juba」と「おまわしおまわし」の楽譜が掲載されている。前述したように、後者は英訳詞が併記されている。また、各曲の右上には楽曲で使用される音符が五線譜上に赤

譜例1 「おまわし おまわし」



⁴ 日本の学習指導要領にあたる米国の教育に関するガイドライン。本文中で度々言及するが、アルファベット付き通し番号をゴシック体で表す。

字で示されている。「おまわし おまわし」はFとGの2音。

授業の手順は、1導入(Introduce)・2展開(Develop)・3終末(Close)に分けて指示されている。

【導入】 8bまず、2種類の猫の絵を見せ、どこが共通してどこが異なっているか比較させる。2種類の絵は、どちらも猫がお腹を見せて仰向けになっている絵であり、一方は写実的なもので、もう片方はデフォルメされたものである。

【展開】次に、「動き(Moving)」と「歌う(Singing)」活動についての記述がある。「動き」では、以下のような子ども達への支援の仕方が示されている。

- ・ 円になる(“Juba”では立つ、「おまわしおまわし」では座る)。
- ・ 6b音楽を聴きながら、歩く速さで軽く手を叩く。
- ・ “Juba”では、間奏の間は、拍子に合わせてジャンプする。
- ・ 歌が繰り返された時は、走る速さで膝を叩く。
- ・ “Juba”の遊び方を学ぶ。(別ページに記載)

6b「質問」では、“Juba”と「おまわしおまわし」の違いを尋ねる。その答えとして、「おまわしおまわし」の方はテンポがずっと遅く、異なる楽器が用いられ、日本語で歌われること点で異なる、とされる。

「おまわしおまわし」の遊び方を学ぶ。(別ページに記載)

次の授業では、“Juba”のロックバージョンを聴かせ、違いを考えさせる。

1a「歌う」では、「おまわしおまわし」を英語と日本語で歌わせる。

【終末】 6b最後に、「動き」に対する評価について指示がある。

まず、子ども達が拍に合わせてどのように自分たちの動きを作り出そうとしているかを観察する。また、各音楽の共通点と相違点をどう言語化するか、また各様式の音楽に合わせてどう動きを作り出しているかという点について、どのような上達が認められるか観察することが示されている。

さらに、脚注(Footnotes)として幾つかの観点が付記されている。

まず、国家基準6bの能力強化の方法として次のことが挙げられている。

【聴取】“Juba”のロックバージョンを聴かせて、子どもには拍に合わせて膝を叩かせる。そして次の質問をする。「特徴的な響きが拍を刻んでいます。それは声でしょうか、楽器でしょうか、それとも何か違うものによるものでしょうか？」(歌い手は、手を叩いたり膝を打ったりして「伴奏」している)

次に、音楽を通して育む技術として「算数」が挙げられている。その方法は、“Juba”や「おまわしおまわし」で円形になった際に、子どもが作った形が何か(円)気づいたか質問する。次に、「円ができたよ」との教師の言葉を真似して3回反復させる。また、「おまわしおまわし」で用いる小さな玉を注意深く見るように促す。そして、「玉は丸い」と教師の後に3回真似して言わせるというものである。

算数的視点に続いて、国家基準8bに関連しSpotlight Onとして次の指示がある。子ども達を、教師の空想上の樹上の小屋に招待する。そして、二つの猫の絵をじっと見る。2枚の猫の絵はそれぞれ同じポーズで描かれているが、それぞれの猫はそれぞれの特徴を持つことに気づかせる。左ページにある上の猫は、黒と白のストライプの毛並みをしている。下の猫は、黄色い毛並みにオレンジ色の水玉模様をしている。上の猫の前足は、両方とも上に上がり、足の裏がこちらを向いている。下の猫の前足は一方が高く上げられており、もう片方は下向きになっている。2つの絵について他に似ている点や異なる点について、例えば「線」「形」「色」など、猫の絵を形成する要素に関連して言語化して答えるように促す。

また、**8b**に関連し、Teacher to Teacherとして非英語による歌の指導について記述されている。子ども達は、自分の言語以外の言葉で歌われる異文化の歌をより繊細に感じ取るようになる。まず、英語による歌を聴かせること。非英語の歌の活動を計画する際には、まず英語による音楽を聴かせる。また、子ども達に原語による味わいを

感じる機会を与えるため、原語での音楽を聴かせる。その後、発音練習と英訳を用いて、非英語バージョンでも歌えるように指導する。

最後に、Character Educationとして8b敬意(respect)に関する人格教育について触れている。この活動は、子ども達に一人一人の違いを尊重することの大切さを伝える絶好の機会となる。活動の間、子ども達は“Juba”と「おまわしおまわし」の違いは何かと問われる。子ども達には、最初の曲がアフリカ系アメリカンの歌であり、次の曲は日本の

歌であることを伝える。多くの文化の遊び歌がそうであるように、“Juba”も「おまわしおまわし」も同じ響きはしない。しかし、それらはどこか似ている。この2曲を歌い遊ぶなかで、どこが同じなのかを考えさせる。

1a また、学年が進むにつれて子ども達には、世界中の歌や遊びを歌ったり遊んだりする機会を与える。このことが、自分と同じ年代の他者にとっては何が大事な事なのかということに対して、尊重したり敬意を持ったりすることにつながる。

譜例2 「かえるのうた」

楽曲2 かえるのうた⁵

日本では大変馴染みのある歌であり、輪唱で楽しむ活動としても取り入れられている。

歌詞「かえるのうたがきこえてくるよ クワックワックワックワッ ケロケロケロケロ(ケケケケケケケ)クワックワックワッ」

英訳によるタイトル The Frog Song

英訳詞「one frog, two frogs, three frogs hop! Can you hear their merry song! Gwa! Gwa! Gwa! Gwa! Gero, gero, gero, gero, gwa, gwa, gwa!」⁶

「おまわし おまわし」と同様、指導書の冒頭では授業のポイント(Lesson at a Glance)がまとめられている。

学習の中心となる要素…「リズム」リズムパターン

目標とするスキル…「歌う」リズムパターンを正確に歌う。

関連する活動…「理科」聴覚を使ってカエル⁷の歌を聴き、比較する。

【教材】は、“One Frog, Two Frogs, Three Frogs…Sing!”, 「かえるの歌」および英訳された“The Frog Song”の3曲である。

使用楽器は、ギロ、サンドブロック、トーンブロックが推奨されている。

【語彙】…パターン、リズム

【国家基準】

1e 指揮者に従って、グループの中で自立的にリ

⁵ 日本では「かえるのうた」や「かえるのがっしょう」とのタイトルがつく場合もある。「岡本敏明 作詞、ドイツ曲」とあり、米国では日本の歌とされているが、ドイツに由来するとされる(『大石他1980:22』)。ただし、日本で日本語により長年親しまれてきたことは事実であり、既に日本文化化しているという認識は間違いではないだろう。

⁶ 英語では gero, gero, gwa, gwa と表記されており、正確な和訳は「ゲロ、ゲロ、グワッ、グワッ」かもしれないが、本研究では日本語の本来の歌詞で記述する。

⁷ 歌詞以外での「かえる」の表記は、読みやすさに配慮し「カエル」と表記する。

ズムを刻みながら歌う。

2a リズムに合わせて楽器を演奏する。

6b 音楽に合わせて動くとともに、音楽についての質問に答えながら表現する。

8b 音楽が理科に関連する方法を認識する。

また、この楽曲についても同テキスト掲載の楽曲に関連するものが紹介されている。

テキストは、左ページに2匹のカエルの絵（それぞれ国旗のついたスーツケースを持って会話をしている）が描かれ、その上に実物の2匹のカエルの写真が小さく掲載されている。また、歌詞とともに「日本では、カエルは自分で陽気な歌を歌うんだよ。聞こえてくるカエルの歌を歌ってみよう」と教師の言葉も示されている。右ページには、「かえるのうた」の楽譜（二長調）があり、日本語歌詞と英訳詞が併記されている。楽譜の左上には、この曲の音階は移動ドのド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ（音名D-E-Fis-G-A-H）に基づいていることが、五線譜により赤字で記されている。

授業の手順は、導入・展開・終末に分けられている。

【導入】 6bまず、“One Frog, Two Frogs, Three Frogs…Sing!”を聴かせ、8bそれぞれのカエルの声がどう異なっているかに気づかせる。

【展開】 「活動する (Playing)」では、テキスト左ページに2匹のカエルがおしゃべりをしている様子が描かれているが、そのカエル達の会話に加わるよう促す。カエルは、それぞれ国旗のついたスーツケースを持っているが、その国旗はカエルの母国を表していることを告げる。（左のカエルは日本で、右は米国）

教師の発言「日本から来た私たちのお客さんはこんな歌を歌います。ケロケロケロケロクワックワックワッ！日本の人たちは、カエルの声を真似するとき、こういう言葉を使うんだね」

英訳詞の「かえるのうた」を聴かせる際には、子ども達には以下のことを促す。

- ・ 6b「ケロケロケロ・・・」（楽譜2段目のリズムパターン）が聞こえてきたら、挙手をさせる。
 - ・ 音楽が聞こえてくる間中、このリズムパターンを口に出したり、リズムに合わせて手拍子をする。
 - ・ このリズムパターンを音楽なしで、ゆっくり練習する。
 - ・ 他の子どもが歌うのに合わせて、ギロ、サウンドブロック、トーンブロックなどの小打楽器で伴奏する。歌と楽器は交互に行う。
- 「歌う (Singing)」では、1e以下のように子ども達を導く。
- ・ メロディの1段目にある小さな「音楽的傾斜」を感じさせ、その音型のふくらみを手で表現させる。
 - ・ 英訳詞バージョンを聞かせ、メロディを歌わせる。
 - ・ 最初は英語バージョンで歌わせ、後から日本語バージョンで歌わせる。

【終末】 1e「歌う」についての評価。

子ども達が、この曲の単純なリズムパターンを正確に感じ取りながら歌えるようになったか観察する。

さらに、脚注として幾つかの観点が付記されている。

まず、国家基準6bの能力強化の方法として次のことが挙げられている。

【動く・読む】 付属テキスト⁸を参照し、様々なカエルのパターンを考えさせる。カエルの絵を切り取った後に糊付けさせ、カエルの人形を作る。そして、7小節目と8小節目の音型に合わせてカエルを上下に動かす。

次に、音楽を通して育む能力として、この楽曲でも「算数」が取り上げられている。まず、子ども達を3つのグループに分けて、それぞれのグループに1、2、3と番号を振る。子ども達は音楽を聴かずに、“One frog, two frogs, three frogs,

⁸ Resource Book:G-24

hop!」の英訳詞にある1、2、3という順番で、その連続する数字に合わせて動く練習をする。つまり、カエル1のグループがジャンプをし、次にカエル2のグループ、カエル3のグループが、歌詞の順番が来たらジャンプをして加わっていくということである。つまり、まずカエル1のグループがジャンプし、次にカエル2のグループ、最後にカエル3のグループがジャンプすることを説明する。子ども達の準備ができたなら、英訳詞バージョンの歌を流して、ジャンプの動きをさせる。

次に、8bの「理科」との関連に関し、以下の指示がある。カエルの声が聴ける（カエルのコンサート）場所には行きたいが、蚊や蛇が出るような場所ではない。カエルのコーラスは主に水際で聴くことができる。カエルは、沼地や湿地帯、湖や池などに生息するが、種類によって鳴き方が異なる。北米のアマガエルはribbitと鳴き、日本の沖縄にいるアマガエルは全く異なる鳴き方をする。低くしわがれた声だったり、ピーピー、チュッチュツ、チーチーなど様々だ。カエルは口と鼻腔を閉じて鳴く。深呼吸をして空気を喉袋の中に吸い込む。カエルが鳴くのを観察すると、ガムを噛んで大きな風船を作るのと同じだと思うだろう。などと生物学的な詳しい説明がなされている。

また、スキル強化 (Skill Reinforcement) の方法として「鍵盤」を用いた活動を紹介している。英訳詞バージョンに合わせて「クワックワックワツ」での一定の拍を、2a鍵盤上のDの音で刻む練習である。この練習が可能であれば、クラスメイトの歌に合わせて鍵盤でのリズム練習をすると良い。歌と鍵盤は交互に行わせる。と記されている。

最後に、Teacher to Teacher として1aに該当

する「リズムチェーン」について言及している。例えば「ケロケロケロケロクワックワックワツ」の言葉に合わせたリズムチェーン、つまりオスティナートを作る。これにより、歌、詩、伝承童謡などに魅力的なリズム伴奏をつけることができる。言葉を用いてボディーパーカッションや身近な打楽器などでも表現することができる。また、最も単純なリズムからスタートすることが大切である。それにより、他のリズムを加えたとしても、子ども達は「基本的なリズムを維持する」ことができるから、としている。また、2aに関連することとして、カエルの様々な鳴き方を共有した上で、それぞれのカエルを真似してリズムチェーンと動きを作りださせる。それぞれのカエルがどう鳴き、何をしているのか、子ども達の中から答えを引き出せるような単純な質問をする。

楽曲3 わらべうた「りんしょう りんしょう」

歌詞「1 りんしょう りんしょう いちりんしょう
 なーもいちりんしょう
 2 りんしょう りんしょう にりんしょう
 なーもにりんしょう
 3 りんしょう りんしょう さんりんしょう
 なーもさんりんしょう
 4 りんしょう りんしょう よんりんしょう
 なーもよんりんしょう
 5 りんしょう りんしょう ごりんしょう
 なーもごりんしょう これあがり」

英訳詞「Rinsho, rinsho, ichirinsho; Number one rinsho, Come along with me!」

5までたどり着いた後に、「これあがり (Come along with me!）」が歌われる。

譜例3 「りんしょう りんしょう」

指導のポイントは以下のようにまとめられている。

学習の中心となる要素…「リズム」リズムパターン

目標とするスキル…「動く」音楽の中に生じるリズムパターンを正確に手拍子で打つ。

関連する活動…「算数」歌詞または視覚映像を通して1から5までを数える。

教材「りんしょう りんしょう」の日本語バージョンと英語バージョンの2曲。

語彙 …リズムパターン

国家基準

- 1a オスティナートを口で言わせる。
 5b 四拍子における四分音符、八分音符、付点音符、四分休符を読む。
 6 音楽を聴きながら、特徴的な部分ができるように動きをつける。
 8b 音楽が算数や社会に関連する方法を認識する。

また、この楽曲に関しても同テキストに掲載されている中で関連する楽曲が紹介されている。

テキストは、左ページ冒頭に「リズム」の吹き出しがあり、「みんなで数えよう」「歌を歌おう」「何番まで数えたかな?」「数を数えるときに手拍子もしよう」との記述がある。そして、1から5までの数字の下に日本にちなんだ人形の写真が数に応じて載せてある。最後に♪♪|♪♪|♪♪|♪♪
四分休符 というリズム型がある。右ページには、楽譜が日英語歌詞で載っており、右上には使用される音符ソ・シ・ド(音名C-E-F)が五線譜上に移動ドで示してある。

授業の手順は、導入・展開・終末に分けられている。

【導入】 8bまず、テキストを見せて、世界中の人々が数えるという行為を行うことを理解させる。あらゆる集団の人々は、数に関する言葉を持ち、それを書き表す術を持っている。また、脚注の Across the Curriculumにある算数と社会の部分

を参照しながら、日本語の数に関する言葉や日本の子ども達が数えるのが好きだと思えるたくさんものについて探求する。

【展開】 「動く (Moving)」8b英語バージョンの「りんしょう りんしょう」を聴かせ、以下のことを質問する。「どんな言葉が繰り返されていましたか?」「歌手が歌った一番多い数は何でしたか?」そして、「りんしょう」というのは意味のない言葉であることを説明する。世界中の子ども達は、無意味な言葉を用いて韻を踏みながら歌って数え方を覚えるということも伝える。

- ・ 5b楽譜1段目の♪♪|♪♪|♪♪|♪♪
四分休符 というリズムパターンを口で言わせた後、手拍子をさせる。
- ・ 教師が「りんしょう りんしょう」とリズムを取りながら声に出すのに合わせて、日本の男の子や女の子が好きな遊びをさせる。
「歌う (Singing)」子ども達が、英語バージョンの「りんしょう りんしょう」を聴きながら歌うことができれば、
- ・ 最後のフレーズ (come along with me!) を何回か復唱させる。
- ・ 左ページの数字とその数の人形のまとまりを指差して、数を教師の後に続いて復唱させる。
- ・ 1d「いち・に・さん・よん⁹・ご」という日本語の数をリズムのオスティナートに合わせて発音させる。
- ・ 日本語バージョンの歌を、フレーズごとに歌わせる。

【終末】

6e「リズム」についての評価。

子ども達が、リズムパターンを正確に、かつ適切なタイミングで手を打つことができたかについて観察する。

さらに、脚注として幾つかの観点が付記されている。まず、国家基準8bに関連し、領域横断的な視点が示されている。「算数・社会」左ページ

⁹ 日本人は、数字を連続して数える場合「いち・に・さん・し・ご」と唱えるが、「し」は「よん」となっている。より実用性のある読み方を採用したのかもしれない。

にある1から5までのアラビア数字を指差し、子ども達に認識させるとともに、数字の下にある添えられている人形の数をそれぞれ数えさせる。Haskinsによる*Count Your Way Through Japan* (1987)を参照し、一から十までの日本語の漢字には、簡単な考え方が反映されていることについて書かれた記述を声に出して読み聞かせる。

次に、音楽を通して育む能力として、「算数」が挙げられている。左ページにあるそれぞれの人形のグループを指して、このように尋ねる。「ここには、1つのぬいぐるみ、2つの青い魚、3つの赤い女の子の人形、4つの黄色い猫、5つの青い男の子の人形があります。全部でいくつあるかどのようにわかりますか?」(一つずつ数える)。教師と一緒に一つずつ数えるよう促す。そして、「全部でいくつありましたか?」と質問する。「りんしょうりんしょう」を歌い、言及したすべての数を数えさせる。

「動き (Movement)」については、6eとの関連において示されている。「移動しながらの動き」では、英語バージョンの「りんしょうりんしょう」を聴かせながら、子ども達に円形になってもらい拍に合わせて左の方に歩かせる。その時に、リーダーとなった子どもには円の外側の端を歩かせる。「1」の数字が聞こえてきたら、リーダーは優しく他の子どもの手を取り、一緒に円の外を歩く。「2」が聞こえたら、リーダーはさらに別の子どもの手を取り、3人で円の外を歩く。このことを「5」までの歌詞で5人の子どものみが円の外に出るまで続ける。最後のフレーズに達したら、全員がCome along with me!のフレーズを歌う。

また、家庭学習との関連が示されている。ここでは、8bとの関連で、「他言語で数えること」についての指示が示されている。方法としては、家族や友人に英語以外の言葉話す人がいる場合はクラスで共有する。「違う言葉で数え方を教えてくれる人は周りにいますか?」と尋ね、英語以外の言語で1から10までを数えることができるように促す。後日、別の言語で数えることができた子

どもにそれを紹介させ、共有できた全ての言語リストを作ってクラスで共有する。

最後に、科学技術やメディアとの関連性についての言及がある。「電子キーボード」を使って、子ども達に数えさせ、音階上の音程に番号をつけさせる。長調の音階で音階上の8つの音、すなわち1から8までが数えられるように援助する。キーボードを子どもの前に設置し、高い音程ほど右側にあることが分かるようにする。教師がハ長調の最初の5つの音を弾き、手を上方に移動させてそれぞれの音程を見せながら、「1・2・3・4・5・6・7・8」と歌わせる。

また、「ウェブサイト」が紹介され、日本の伝統的な「くまさん」¹⁰という曲と現代的な「りんしょうりんしょう」の2つの録音があり、比較することを推奨している。加えて、日本の音楽に関するウェブサイトの紹介も行っている。

考察

まず、以上の3曲に関する指導内容について概観すると、全体として詳しい解説が施されており、日本の就学前向けの指導書と比較すると情報量が格段に多いことが言える。また、学習のポイントが太字や色で目立つように記述されており、その見出しだけで重視すべき指導内容が分かるようになっている。さらに、指導書冒頭に囲みで示された指導のポイント (Lesson at a Glance) では、学習すべきポイントが短い言葉により箇条書きで記述され、指導書を読む時間が確保できない場合でもここを確認すれば要点が把握できるように工夫されている。また、それぞれの指導内容は具体的で分かりやすい。

また、音楽を他分野と関連させた活動についても詳しく記述されている。例えば、「おまわし おまわし」であれば、美術との関連で猫の絵の比較をさせ、違いに気付かせる。「かえるのうた」であれば、理科と関連させカエルの生息場所、カエルの種類や鳴き方の種類、どのように声が出ているのかといった生物学的観点など多様な角度から

¹⁰ この楽曲については特定できていない。

の考察が含まれている。そして、例えばイラストで両国の国旗をカエルに掲げさせることで、同じアマガエルという種類でも日本と米国では見た目や大きさ、鳴き方などが異なることを含意させ、それらの違いを尊重させようという意図も感じられる。このように異文化を尊重するという視点は、これらの日本の歌を英語のみならず原語である日本語で歌うことも促し、その違いに気付かせ、かつ違いを尊重する態度の育成を促すものとなっている。しかし、ただ異なるだけでなく、子どもの歌には国や地域を超えてどこか似ている部分が存在していることにも気付かせる試みがなされている。また、「りんしょう りんしょう」においては、家族や友人を含め周囲に英語を母国語としない人がいれば、家庭や地域でその人物から数の数え方を習い、教室に戻って紹介し、それらを集めてリストを作ってクラスで共有するという試みも紹介されている。また、日本の子ども達にとって数えるのが好きと思うものについても思いを巡らせるなど、他者のことを思い他者の気持ちを理解させるような試みも紹介されている。このように、異文化理解を就学前より積極的に実践しようとしていること、また教室内にとどまらず家庭や地域にも広がる幅広い活動を促す教育内容は、単に米国の社会状況を反映しているにとどまらない、民主的で平和主義的な愛情ある教育を象徴しているように思われる。また、「りんしょう りんしょう」において言及されている「科学技術とメディアとの関連性」については、昨今日本でも漸く教育養成課程に対し指導内容として求められはじめた項目でもある。

さて、本研究で特に着目する小学校音楽科の〔共通事項〕にあたる音楽理論的要素であるが、就学前でありながら、日本と違い多くの言及がなされている。まず、3曲に共通して「リズム」の学習が重視されている。リズムパターンを把握させ、一定のリズムを刻むことが共通の目標として掲げられている。そのリズムを、まず口で言わせ、次に手拍子や膝を打つといった動作を通して身体で感じさせる。リズムの刻み方は、遅いテンポや速いテンポ、それを歩く速さ、走る速さなどと小さい子どもにも分かりやすく表現したり、拍子に合

わせてジャンプさせるなど音楽と身体の動きを一体化させ、リズムを身体化させる試みがなされている。また、「りんしょう りんしょう」においては、四分音符、八分音符、付点音符、四分休符といった、日本では小学校で学習する内容にも言及がある。さらに、民族や文化によって異なる音階についても、指導する内容には含まれないものの、指導者が把握し理解した上で指導することが求められている。使用楽器については、小打楽器であるギロ、サウンドグロック、トーンブロックなどが伴奏楽器として紹介されている。後の二つの楽器については日本ではあまり馴染みがないが、様々な打楽器に触れる機会が豊富な環境であることが分かる。つまり、幼少期から様々な楽器に触れるとともに多様な音色に親しむことが意図されている。また、日本でも近年、国語のみならず他の教科・分野においても言語活動の充実が図られている。本研究で取り上げた3曲の指導にあたっては、多くの質問を用意、工夫し、子どもの考えを引き出し言語化に導かせる工夫がなされている。さらに、英語だけではなく外国語での歌唱活動も含めてあり、高度な言語教育が行われていることが分かる。他言語の響きを味わうとともに、英訳が添えてあることで、意味内容も把握できる仕組みになっている。

おわりに

以上のように、考察対象とした日本の子どもの歌に関する音楽理論的要素については、身体で感じ取りやすいリズムに関するねらいが主に設定され、拍の取り方に加え、音符や休符の理解を含めたリズムの感じ方について身体活動を取り入れた活動方法が詳しく紹介されていた。また、他分野との領域横断的な観点や平和教育につながるような人格教育がとりわけ具体的かつ特徴的だったように思う。日本でも就学前教育・保育の内容は5領域で構成され、かつ幼児の活動は他領域との関連の中で総合的に捉えていく必要がある。しかし、現場の実態としては指導者にとってどのように関連付けて良いか十分に理解されていない部分があり、各施設によっても取り組み方が異なっていると言える。米国のように、ある程度教育要領自体

を具体化し、指導書においても具体的内容が示してあるならば幼児教育現場でも取り組みが検討しやすく、そこから別のアイデアが生まれたり、独自の活動へと展開されていく可能性も生まれるだろう。

参考文献

- Silver Burdett. 2005. *Making Music Teacher's Edition Part One Grade K* (2008edition). Person Education.
- 大石みつ・下村幸・鳥居美智子 共編 1980年『幼児保育のための楽しい歌とあそび』（音楽之友社）
- 加藤晴子・奥忍 2002年「国際理解と学校教育——「郷土のこもりうた」から「世界のこもりうた」へ」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第2巻pp.11 - 20

- 共同研究実行委員会 2009年「共同研究 日本の童謡、子どもの歌の現状と分析——保育者養成校と保育現場アンケートより——」『全国大学音楽教育学会 研究紀要』別冊号
- 櫻井琴音・早川純子 2018年「幼小接続期における〔共通事項〕に着目した歌唱教材の研究」『西九州大学子ども学部紀要』第9号pp.77 - 86
- 曹念慈 2005年「教科書『Silver Burdett Making Music』の低学年の内容からみる諸芸術教科を統合する方法」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XV II pp.11 - 19
- 董芳勝・足立広美 2009年「新学習指導要領と音楽科教育」『創大教育研究』第18号pp.45 - 50
- 村上玲子・櫻井琴音・上谷裕子 2015年『アクティブラーニングを取り入れた子どもの発達と音楽表現——幼稚園教諭・保育士養成課程』（学文社）

Abstract

The purpose of this study is to examine how intercultural education for young children is practiced in a multicultural country. Focusing on the singing activity, I analyze an American music text book. Among many songs in the textbook, I deal with three Japanese songs and consider how they are presented and taught in kindergarten classrooms. Although the textbook is designed for young children under school age, references of musical elements, i.e. theoretical aspect and various disciplinary perspectives are provided as well as emphasizing on a respect for differences of others. The country's educational guideline, however, largely influences the way in which teaching is actually planned and conducted.